

最新アンギオグラフィ装置導入

脳・脊髄・神経センター 脳血管内治療科
部長 盛岡 潤医師

城山病院ではシーメンス社製の最先端のアンギオグラフィインターベンションシステム「Artis Q BA Twin」を8月に導入しました。関西で初めて導入されたこの装置で、従来では困難だった検査や治療が可能になりました。盛岡医師に話を聞きました。



日本脳神経外科学会専門医
日本脳神経血管内治療学会専門医
日本脳卒中学会専門医

アンギオグラフィとは

血管造影検査法のこと、血管内に造影剤を注入し、その流れをエックス線で撮影することによって、血管そのものの形状や血流を観察する方法です。略して「アンギオ」と呼ばれることもあります。

一般的には、手や足の血管からワイヤーを使って管(カテーテル)を入れ、遠く離れた脳や心臓まで血管の走行に沿って推し進めていき、目的の部分の血管に達したところでエックス線を通して、造影剤を流し込み、撮影をします。次にこの装置の優れたところを話しましょう。

被曝量が少なく、CT検査も可能

今回導入した装置は従来では困難であった1万6384階調を大幅に上回る6万5536階調のデ



ータ検出が可能になりました。つまり、従来装置では限界だった細かな血管造影が瞬時に映し出せるということです。言い換えれば、放射線の量も少なく、患者さんの被曝量が格段に少なくなります。

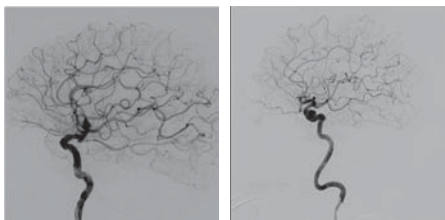
これは非常に画期的なこと、手術前に細かな血管の構造を十分に把握し、よりの確かな戦略を立てることによって、治療の成功率が格段に上がります。また、従来では治療に時間がかかった動静脈奇形などの疾患でも被曝による合併症が減ります。

さらにはCT検査(コンピュータ断層撮影法の略。身体の断面写真が得られる検査)と同様な画像も同じ装置で可能になりました。アンギオ装置を使う手術中にも、CT検査を行いたい時があります。以前は患者さんをいったんCT装置の所まで移動し検査をしなければならなかった。

高度IVR (Interventional radiology)治療

この血管造影検査法は治療にも用いられています。カテーテルを入れ、それを使っ

て目的の脳動脈瘤にコイルを詰めるコイル塞栓術やステントを入れて狭窄した血管を広げるなどでIVR治療あるいは血管内治療と呼ばれます。もともとは心臓血管で行われていた治療技術が脳血管領域に広がりました。1997年に脳動脈瘤におけるコイル塞栓術が厚生省に認められ、それまで開頭手術に頼るしかなかった治療が、身体にメスを入れないこととなり、急速に進歩しました。今では治療道具の開発も加速して1年単位で進歩しており、我々医師も研修をおろそかにすると浦島太郎状態になります。当センターでは研修が奨励され、一人一人が最新技術習得に努めています。



アンギオ装置での血管造影画像
左写真下の狭窄した血管をIVR治療で拡げ、血流が回復